

全日本実業団が 10 倍面白くなるコラム②

男子 800m で世界に挑んだ男、横田真人が“思い出の長居”で実業団ラストラン

文：寺田辰朗

男子 800m の横田真人（富士通）が、実業団ラストランの大会として全日本実業団に臨む（10 月の大会にも出場予定）。

「僕は結果にすごくこだわって競技生活をしてきました。だからこそ身を引くことを決めましたが、だからといって、競技者であるうちは負けるつもりはありません。最後までアスリートとして、“横田らしく” 終わりたい」

横田は 2009 年に 1 分 46 秒 16 の日本記録（当時）をマークし、2012 年にはロンドン五輪に出場した。男子 800m の日本記録更新は 15 年ぶり、五輪代表は 44 年ぶりという快挙だった。

今年 6 月の日本選手権では、現日本記録保持者の川元奨に真っ向勝負を挑んだが 2 位と敗れた。7 月の 2 レースに一縷の望みを託したがリオ五輪標準記録を破ることができず、今シーズン限りの現役引退を表明した。

横田の足跡や特徴を振り返ると、中距離界に果たした役割、横田だからできたことが見えてくる。“ラスト実業団” にも、横田らしく臨もうとしている。

●世界陸上で大きくなった本気度

今年の全日本実業団会場である長居陸上競技場の印象を問われると、「相性が良いトラック。一番好きかもしれません。長居で走るとテンションが上がりますね」と横田は答えている。慶大 2 年時の 2007 年に大阪世界陸上に出場。日本選手権は 2007 年も長居で走ったし、ロンドン五輪代表を決めた 2012 も長居開催だった。国際グランプリ大阪でも 2010 年の優勝をはじめ、3 回走っていずれも好成績を収めてきた。

なかでも大阪世界陸上出場は、競技人生の転機になった。標準記録を突破していなかったが、1 種目に 1 人は出場できる“開催国枠” が日本選手権 2 連勝中の横田に適用された。

「ラッキーと思いましたが、選ばれたからには最高のパフォーマンスを出すべきだと思います。陸連科学委員会からのデータで、1 分 46 秒台を出さないと準決勝に進めないとわかったのですが、そのためには 400 m を 51～52 秒台で入る必要がある。大学に入ってから 53～54 秒で通過していましたから、経験したことのないスピードが求められたわけです」

序盤は 3～4 番手と、格上の選手たちを相手に積極的な位置取りで走り、600 m まではレースの流れに加わることができた。最後は 10m 以上引き離されての 7 位だったが、1 分 47 秒 16 と自己記録を 1 秒 26 も更新した。

「日本が世界を目指してこなかった種目だということも理解していましたし、世界陸上を走って今の自分では歯が立たない、と痛感もさせられました。でも、ホンモノの世界を体験したことで、そこに挑戦したい気持ちが強くなったんです。それをやるのは自分だと思った。あのとき長居で走らなかつたら、ここまで続けていなかったと思います」

●リスクを取ることの意味

世界へ挑戦する気持ちを強く持ったが、翌 2008 年の北京五輪には出場できなかった。大阪世界陸上のタイムで一度は破った北京五輪標準記録が、秋になって 1 分 47 秒 60 から 1 分 47 秒 00 に引き上げられてしまったのだ。08 年も標準記録に挑んだが、1 分 47 秒 35 がシーズンベストに終わった。

「大阪世界陸上で本気度が変わったとはいえ、1 年間の継続では結果が出せませんでした。本気度も、今から考えたら学生レベルだったと思います。そこから日の丸にこだわり始めました。世界陸上は運良く出られましたが、代表は本来、自分で奪い取るもの。何かを変えないとダメだと考え始めました」

2009 年のベルリン世界陸上前も標準記録を切ることができなかったが、選考会の日本選手権でも標準記録に挑んだ。中距離の場合、記録と勝負の“二兎を追う” ことは難しいと言われている。その状況でも横田は、敢然と記録に挑んだ。400 m を 51 秒台で通過。だが、優勝はしたものの後半のペースダウンが響いて 1 分 48 秒 53 にとどまった。

「リスクのある選択でしたが、誰も前に出る雰囲気になかったので、優勝は自分しかいないと確信しました。それで勝ちましたが初めて、日本選手権に勝って悔しいと思えたり、それらを客観的に見たら自分が成長したことがわかりました。それがユニバーシアード（4位）や日本記録（1分46秒16）につながったと思います」

7月のユニバーシアードは最後までメダル争いに加わることができた。秋は9月から10月にかけて5連戦して、その最終戦で15年ぶりの日本新をマークした。

「リスクを取らないと見えないこともある」と、横田は強調する。「トップレベルになればなるほど、（日本選手権のタイトルなど）守りたいものも生じてしまうのですが、そこでもう一步を踏み込むことで、上の世界の見え方が違ってきます」

2009年は五輪&世界陸上こそなかったが、横田にとって「一皮むけたシーズン」になった。

●24時間365日、アスリートとして生活する

横田がロンドン五輪代表になることができたのは、長期間にわたって1分46秒台のレベルを維持できたからだ。

日本記録翌年の2010年はアジア大会が11月だったため、日本選手権後の夏はヨーロッパを転戦。秋に1分46秒18を出してアジア大会に臨み、1分46秒48で4位と健闘した。男子800mでは1978年大会を最後に日本が獲得していないメダルに、あと1つという順位だった。

2011年には1分46秒85とやや後退したが、五輪イヤーの2012年に1分46秒19と日本記録と変わらないタイムを出し、男子800mで44年ぶりの五輪代表入りを実現させた。

それ以前の日本の男子中距離選手は、“ピークは2年”と言われ、ハイレベルの記録は2シーズン程度しか持続できなかった。その常識を覆したのが1500mでは現日本記録保持者の小林史和（NTN。現愛媛銀行監督）であり、800mでは横田だった。

「2010年に富士通に入社して、米国のサンディエゴを拠点としているヨアキム・クルズ・コーチのところへ何度もトレーニングに行くことを認めてもらいました。クルズ・コーチは僕の2年間の練習実績を見たらうで、五輪&世界陸上でラウンドを勝ち進むには、スタミナやタフさも必要だとアドバイスしてくれた。持久的なメニューも増えましたし、設定タイムも上げました。体はキツくなりますし、ケガの可能性も大きくなりますから、体の強化やコンディショニングも必要になる。それを生活の中で整えないといけません。栄養や休養もそれまで以上に考えるようになりました。休んでいるときも友人と遊んでいるときも、24時間365日、アスリートとして生活するようになったんです」

1分45秒台を出すことはできなかったが、1分46秒台は安定して出せるようになった。ロンドン五輪は予選落ちだったが、あと1人抜けば準決勝進出という健闘で、レース後の横田は「やれることはやった」という表情を見せていた。

●「引退する奴に負けていいのか？」

世界がより明確に見え始めた横田は、さらに自分を追い込むため、2013年1月から米国の別のチームに留学する。結果的にその試みは失敗し、13年、14年と大きく低迷した。日本記録も川元によって14年に破られた（川元は日本人初の1分45秒台となる1分45秒75）。

14年9月に帰国後、横田は自分の練習スタイルに戻し、昨年は1分46秒54と3年ぶりに1分46秒台をマーク。リオ五輪を狙う態勢を整えたが、今年の日本選手権は川元がスタートから標準記録を狙って飛ばし、横田も食い下がったが最後は引き離された。1分46秒22と1分47秒45。そのレース直後に、横田は今シーズン限りの引退を表明した。

「今の自分の力では、オリンピックに出てもロンドン五輪以上の結果は難しい」と判断せざるを得なかった。と同時に後輩の川元が、自分を超えて行ったことがわかったからでもあった。



「僕も標準記録を狙って飛ばすつもりでしたが、川元にあの走りをされたら勝てません。僕が2009年の日本選手権でやったように、川元がさらに上の世界に足を踏み入れたレースだったと思います」

横田は自身の経験などを「次の世代に継承したい」と、つねづね考えて来た。川元は日本選手権の1週間後に1分45秒97と標準記録を突破し、リオ五輪代表入り。44年間途絶えていた五輪出場が、横田、川元と2大会続いたのである。「リオ五輪では準決勝に行く力はあると思います。今の川元ならやってくれるはず」と、横田も期待を寄せる。

そしてリオ五輪とともに夏が終わり、秋のメインイベントである全日本実業団が9月に行われる。川元は出場しないが、横田がどう“横田らしさ”を見せてくれるのか。

「大会記録を狙いに行けたら面白いので、それができる準備をして臨みます。ただ、チームが総合優勝を狙っているので、8点（優勝）を確実に取らないといけません。全日本実業団は大会新のボーナス得点もありますし、どういう展開にするか難しいところです。まあ、どんな形でもレースを引っ張りますよ。川元以外は頑張っているとは言えない現状ですから、1対7で走ってもいい。勝って引退する、と言っている選手に勝たせないようにかかってきて欲しいですね」

後輩たちを挑発することで、最後までアスリートとしての走りをまっとうする。それが実業団ラストランで見せる“横田らしさ”だ。